

学びのたより

東海国語教育を学ぶ会

2013年1月12日

文責：JUN

あけましておめでとうございます

2013年(平成25年)が明けました。

政局が動き、国内情勢にもさまざまな動きが見られます。この変化をどうみるかは別として、落ち着いた暮らしができてにくいと感じている人は依然として多いのではないのでしょうか。大人がそうだということは、子どもたちもそういう状況の中で生きているということだと考えなければなりません。

子どもの生活はそれぞれの家庭の経済的状況、社会的状況に大きく左右されます。その状況が芳しくなく、格差も広がっているといわれています。この格差は、生活ぶりに対してはもちろん、いわゆる学力にも影響を及ぼしていると言われていています。多くの子どもの成長を支える学校の教師にとって、この現実から目をそらすことはできません。

そこで、はっきり認識しておきたいのは、わたしたち教師は、格差をそのまま受け入れ子どもを差別化するようなことがあってはならないということです。大切なのは、格差を乗り越え、すべての子どもの可能性をひらくのだという自負をもつことです。

それには、まずは教師が、子ども一人ひとりに深い思い入れとケアの心を抱いて接しなければなりません。そのうえで、さまざまな違いを超えて学び合う子どもの「つながり」を築くことです。つまり「協同的な学び」、わたし流に言えば「学びあう学び」を実践し、そのことにより、他者から学び、他者とともに生きられる子どもを育て、すべての子どもの学びをひらくことです。

人は一人では生きられません。他者の助けを借りたり、他者から学んだり、他者に寄り添ったり、他者のために力を尽くしたりして、他者とともに生きていかなければなりません。こういう時代だからこそ、こういう社会情勢だからこそ、共に生きるという生き方が大切なのです。個の自立は共生の営みのうえで成り立つことなのですから。

いま、「学びの共同体」を目指す学校が急速に増えています。それだけに、それが一時期の流行に終わらないよう、それぞれの学校が虚飾化したり形式化したりしないよう、子どもの現実を見つめた地道な取り組みを続けなければなりません。間違っても、「学びの共同体」という言葉だけが踊るような学校づくりを行ってはなりません。

そういう意味で、今年は、「学びの共同体」の深まりを求める年になるのではないかとわたしは考えています。

「ジャンプのある学び」と文学の読み

どうしても書かなければいけないことがあります。それは、「ジャンプのある学び」と文学の読みとの関係についてです。

というのは、わたしが昨年夏に刊行した『「学び合う学び」が深まる時』において、「文学の読みにおけるジャンプのある学び」という一文を書いたところ、佐藤学先生が、「文学の授業においては“ジャンプの学び”は存在せず、むしろ“読み深め”が“ジャンプの学び”として位置づくことになる」と述べられたからです。佐藤先生は、『総合教育技術』（小学館）誌上において「学び合う教室・育ち合う学校」を連載しておられますが、その最新号(1012年12月号)において「ジャンプする学びの創造」と題する文章を発表しておられ、その中で上記の言葉を述べられたのです。

わたしが「文学の読みにおけるジャンプのある学び」と書き、佐藤先生が「文学の授業においてはジャンプの学びは存在しない」と述べられているのですから、そこだけと比較すると逆のことを言っているのではないかと思われそうです。しかしそうではないのです。

1 文学の読みの特殊性

- ・ 文学の読みに正解はなく、多様な受けとめをされるのが文学の文学らしいところである。
- ・ 読みは一人ひとりの子どものもの。
- ・ 文学は、言語によって表現される芸術作品。
- ・ 文学の授業で、互いの読みを聴き合うということは、一つの「正解」を求めるためではなく、それぞれの読みを深めるために意味のあること。

これは、『「学び合う学び」が深まる時』（P103～104）において、わたしが記していることです。いわば、わたしの考える文学の授業における原則です。

このことから考えると、一つの課題を設定し、学級全員を一つの読み方に行き着かせるために「ジャンプ」を仕掛けるということはありません。一つの文、一つのことばをめぐって互いの考えを述べ合うことは当然ありますが、それは、一つの読み方に収束するために行うのではなく、一人ひとりがそれぞれの読みを確かめ、一人ひとりが何度も文章に当たり、さらに一人ひとりが読みの深まりを目指すために行うのです。ですから、授業後に一人ひとりの子どもの内に生まれる「味わい」には微妙な「その子らしさ」が生まれます。まずそこが、芸術以外の他教科の学びとの違いであり、文学の読みの特殊性なのではないでしょうか。もちろん、芸術以外の教科においても「その子らしさ」が生まれるでしょうが、それと芸術の学びで生まれるものとは質的に異なります。

そう考えていましたから、「ジャンプのある学び」の必要性が言われるようになってか

なりの期間、わたしはずっと文学の授業においては「ジャンプ」ということばを使わないできました。

けれども、多くの教師の文学の授業に接するうち、このままでは「読む」ことの質が劣化し、その結果、子どもたちに文学の味わいの深さを伝えられなくなるという危機感を募らせるようになりました。それは、「読みは一人ひとり個別のもの」という一方の原則にとらわれ、授業において、それぞれの読みをまるで陳列物のように出し合わせるだけになっているケースがかなり見られたからです。そこに、「個々の読みを磨くために、他者の読みに触れ学び合う」というもう一つの原則の実現がなんとしても必要でした。わたしは、これがなければ、文学の授業は授業として成立しないと思いました。

そういうことから、わたしは、一人ひとりの子どもが、自らの読みの深まりを意識して文章にさらに肉薄する場面を授業のなかに生み出すことが必要だと思いました。それを、学びの質の高まりを目指して行う他教科の場合と合わせて「文学の授業におけるジャンプ」と呼ぶことにしたのです。

2 読みを深める三つの対話

作品を読めば、何らかの読みがそれぞれの子どもの中に発生します。しかし、それだけだと、作品の内部にまだまだ触れ切れていない子どもが何人もいるでしょうし、かなりの味わいをしている子どもでもさらなる読みが生まれる余地は必ずあります。ですから、そこで何らかの学びが必要になります。それを一言で言い表せば「読みの層を重ねる」という営みだと言えます。

層を重ねるとは何度も文章を読むということです。もちろんそれはただ繰り返し読むということではありません。少しでも具体的に描こうと考えて読むとか、何らかの目的を抱いて読むとか、そういう心の作用を伴って読むのです。

この「文章（テキスト）を読む」ということについても、拙著『「学び合う学び」が深まる時』で次のように述べています。

- ・ それは、一人ひとりの子どもが、それまでに抱いていた読みをテキストというふるいにかける営みになる。(P124)

これも、文学の読みにおける大切な原則です。

そこで考えたいのは、どうすれば、テキストというふるいにかけるという心の作用が生まれるのかということです。

心の作用は、何度も何度も読むという個人的な行為によって生まれることもありますが、同じように作品を読んでいる他者の読みに出会うことによってより顕著に生まれるとわたしは考えています。それは、読みは一人ひとりのものという原則と少しも矛盾することではありません。むしろ、それぞれの子どもが読みの質を深めるうえで、他者の読みとの交流は欠かせないのです。

他者の読みには、自分の読み方とはまるで異なるものが存在することがあります。他者の読み方に触れて驚いたり感心したり違和感を抱いたりすることもあるでしょう。もちろん同じように読んでいる人もいるのだと、強い共感を抱くこともあるでしょう。どちらにしても、他者の読みに出会うことによって、一人ひとりが自分の読みを確かめ、改めて読んでみなければならぬと感じたりするのです。

作品の味わいは、どれだけ作品のことばと向き合ったかという密度、つまり読みの層の密度と深く関係します。しかし、作品に向き合うという行為は、そうしなさいと強制されてしぶしぶ行うものではなく、自らの内から引き出してくるものでありたいと思います。その引き出しを可能にするのが、他者の読みとの出会いなのです。

こうして考えてみると、作品の味わいは、三つの「対話」によって成り立っているということがわかってきます。もっとも大切な対話は、作品（テキスト）との対話です。それはここまでで述べてきた「読みの層を重ねる」ということですから、そのことの大切さはもう言わずもがなでしょう。二つ目の対話は、仲間との対話です。このことについては、読みを出し合う話し合いの授業を想起されるでしょうが、対話にならない授業では意味がありません。先に述べたように、それぞれの子どもがもっとも大切だと述べた作品との対話を十分にできるために行うものだからです。そして、三つ目の対話は、自分自身との対話です。読みは子ども一人ひとりのものなのですから、それぞれの子どもが、絶えず自分の読みを求めて自己内対話を繰り返さなければなりません。

文学の授業は、単に、子どもが自分の読みを語るだけのものではないのです。大切なのは、一人ひとりの子どもが三つの対話を実践することです。授業が単なる発表会になったり、子どもの読みの陳列の場になったりするのには、それが実践されていないからだと言えます。そして、それは子どもの責任ではなく、そうなるように促してこなかった教師の責任なのです。

3 読みが深まる五つの場面

わたしは、文学の読みにおける「読み深め」を「ジャンプ」ということばを使って書き表しましたが、その際、五つの「ジャンプの生まれる場面」を提起しました。

その5点で述べているのは、当然のことですが、文学の授業における「読みの深まり」が生まれる場面です。わたしが「ジャンプ」ということばを使ったのは、この5場面のなかにわたしの考える原則がはっきりと存在していて、まさに、一人ひとりの子どもの読みを深められると考えたからです。ですから、「ジャンプ」ということばは「読みの深まり」または「読み深め」と言い換えることができます。

- ① 子どもの考えから生まれる読みの深まり
- ② 音読から生まれる読みの深まり

- ③ グループの学び合いから生まれる読みの深まり
- ④ 教師の投げかけから生まれる読みの深まり
- ⑤ 子どもの可能性にかける読み深め

互いの読みを聴き合い、読みの層を重ね始めると、そこで出された考えが契機となって、みんなで考えてみよう、ことばに触れ直してみようという事柄が生まれます。それは教師が一方的に与えるものではありません。三つの対話を実践することによって、子どもの中から生まれ出てくるものです。それが一つ目の「ジャンプ」つまり「読みの深まり」です。

それに対して、二つ目は、どちらかと言うと作品の文章との対話から生まれてくるものです。読みの層を重ねるうえで欠かせないもの、それが「音読」です。もちろんここで音読をしなければと考えるまでに、互いの読みを聴き合う仲間との対話も行われているでしょう。けれども、その時点ではどう考えたいのかという方向が定まっていなくて、音読をしてみたいことがはっきりしてくるということがあるのです。それを二つ目の「ジャンプ」「読みの深まり」としました。

そうではなく、仲間との対話が引き金となって生まれてくるものがあります。わたしはすべての子どもの学びを保障するためには、全体学習一辺倒から脱却してグループ学習を取り入れなければならないと述べています。少人数ならすべての子どもが気取らず自然体で考えを述べ合うことができ、子ども相互の対話が濃密になるからです。つまり、グループの場は、ある意味全体の場よりも学び合いが豊かになるのであり、それだけに、グループ学習のなかから、読み深まりにつながる重大な気づきが生まれることが多々あるのです。それが三つ目に掲げたことです。

互いの読みを学び合ううちに、それらの子どもの読みに対して、文中のことばに注目して考えてみる必要があると感じることがあります。先に述べた「テキストというふるいにかける」ということです。そのことばへの着目を子どもがしてくれればよいのですが、どんな場合でも子どもが気づくとは限りません。そういうとき、適切なタイミングを見計らって、ともに作品を味わっている教師からそれを投げかけることがあってもよいとわたしは考えています。いえ、作品との対話の一つとして、それは必要なことなのではないでしょうか。それが四つ目なのです。

こうして見ていただくと、わたしが述べた「ジャンプのある学び」とは、すべて、子ども一人ひとりが文章（テキスト）に深く出会い触れ直すためのものであり、一人ひとりがそれぞれに作品の読み深めを目指すものであることがわかっていただけたと思います。つまり、文学の読みにおけるジャンプは、ある一つの「高度な解釈」に行きつくためのものではなく、教室でその文学を味わっている子どもたちの状況に応じて、それぞれが読みの深まりを堪能できるように行われるものだと言えるでしょう。そのことを言い表したのが、五つ目に掲げた「子どもの可能性にかける読み深め」なのです。決して教師の求める「解釈」に行き着くためにかけるものではなく、子どもの読みの可能性がみえる教師によって、子どもとともに、その可能性に向かってかける「ジャンプ」「読み深め」なのです。

3 読みの可能性を追求する心こそ

「ジャンプ」という行為は、身体的行為としては高さあるいは距離を目指すものです。行きつくことのできないような高さや距離ではなく、頑張れば届きそうな高さや距離に対して行う身体的行為です。ということは、「ジャンプのある学び」も、学びの高さあるいは距離を目指すというイメージになります。そこでふと思えます。文学の読みにおいても、その質を保障していくことは「高める」あるいは「遠くまで跳躍する」というイメージになるのだろうかということです。

そういえばわたしは、これまで一度も「読みを高める」とか「読みを跳躍させる」とは言いませんでした。「読みが深くなる」「読みを深める」と言ってきました。それは、文学の読みにはどちらかと言うと、「深める」というイメージが存在していたからです。

岩波国語辞典には「深い」とは「表面・外から底・奥までの距離が大きい」ことだと書かれています。そういうことからすると、「深める」とは、高さ・距離的な感じではなく、奥にあるものを探るという行為だということになります。わたしが、長い期間、どうしても、文学の読みにおいて「ジャンプ」ということばを使えなかったのには、それとなくこういう感覚を抱いていたからだと思われま

わたしの「子どもの読みをジャンプさせよう」という呼びかけは、授業の中で、読みが単なる陳列物のようになっている状況への憂いから始まったということを前述しました。そのわたしの思いは、多くの人の危惧と共通するものだと思っています。

読むという行為はなんとも奥深いものです。同じ作品でも読むたびに新たな気づきがあります。それが文学であり、それだからこそいつまでも読むことの魅力を感じさせてくれるのです。もちろん、初めて読む作品もあります。好きな作者の新刊本など、わくわくする思いで買い求めます。文学のたのしみを知ると、手の届くところに本がないとさみしいと思うようにまでなります。

わたしは、すべての子どもにそうなってほしいとまでは思いません。けれども、文学を読むということは別の人生を生きるということであり、ことばの奥にある世界は底がないほど広大で豊かなものだという、その感覚が存在する森に一步でも二歩でも足を踏み入れることができるようになってくれたらと思います。

それには、単に文字を追うだけの読みではなく、読みの深まりを体験させたい、させなければならぬと思います。間違っても、発言の多い見栄えのよい授業にすることを目指してはなりません。

子どもが読みの可能性を感じ、どこまでもその可能性を探し続けようとするような授業をつくり出しましょう。それには、子どもより先に、教師こそが、読みの可能性を求め続けることです。「読み深め」は、子どもと教師の情念の深さから生まれるのですから。わたしの「文学の読みにおけるジャンプ」は、そのように受けとめていただけたらうれしいです。